

19世紀末の「無意識の発見」について

札幌学院大学大学院 臨床心理学研究科 村 澤 和多里

はじめに

今では誰もその存在を疑わなくなった「無意識」という概念が発見されたのはそれほど昔のことではない。西欧においては150年前、日本ではせいぜい100年前のことである。

西欧における「無意識」という概念の成立については、精神医学史家のH.Ellenbergerが詳しく論じている。この短報ではEllenbergerの『無意識の発見』(Ellenberger, 1970/1980)を主に参照しつつ、西欧において19世紀末に「無意識」という概念が見出されていく過程についてまとめていく。

Ellenbergerによると、古代からシャーマニズム的な治療の過程において、シャーマンやあるいは術がかけられた者が「憑依状態」になることはあった。そのような日常とは異なる意識状態(トランス状態)に入ることで、行方不明になった魂を呼び戻したり、取り憑いた魔物を祓うことができたのである。

18世紀末の西欧では、まだ祓魔術(悪魔祓い)exorcismが信じられていた。有名なところでは南ドイツのカトリックの神父J.J.Gassnerが祓魔術によって数々の奇跡を起こして人々を熱狂させていたことが知られている(Ellenberger, 1970/1980)。

メスマリズム

Gassnerによる祓魔術は、患者をある種のトランス状態に導くことや、暗示のようなものを与えたという点では「催眠hypnotism」と関連した状態ではあると考えられる。しかし、後に述べるように、歴史的には「催眠」という言葉は1850年頃にイギリスの医師、J.Braidが作り出した言葉である。それ以前は「メスマリズムmesmerism」あるいは「磁気術magnetism」と呼ばれていた技

法の一つの側面として、催眠状態が利用されていた(Ellenberger, 1970/1980)。

メスマリズムという言葉はGassnerと同時期にウィーンやパリで活躍したF.A.Mesmerという人物に由来する。Mesmerは当時知られるようになってきた電気や磁力に着目し、これらの力が空間を満たしている流体のなかで働くことによって、人間や動物が活かされていると考えた。そして、身体を流れる磁気を操ることによって、心身の病を治療することができるという「動物磁気説(Animal magnetism)」なるものを唱えた。MesmerはGassnerの治療の効果自体を否定しなかったが、それはGassner自身が気づかぬうちに動物磁気を利用していたためであり、自らの説により「科学的」に説明可能であると述べた。神の技ではなく、自然科学的な現象であるという認識が生まれたときに、心は科学的研究の対象となった。

Mesmerは、この「動物磁気」をいわゆる鉄などの金属に生じる「磁力」とは異なるものと考えた。磁気治療を始めた初期のころ、Mesmerは金属磁石を使って患者に「分利(ヒステリー発作、痙攣など)」を起こさせることで、元々の症状が漸次的に改善していくことに気がついた。その後、金属磁石を用いなくて患者の肩から腕へと手を滑らせたり、腹部をさすることによって同様の発作を起こさせることが可能であることを発見し、金属磁気とは似てはいるが、それとは異なるものが動物の体内に流れていると考え、これを「動物磁気」と名づけた(Thuillier, 1988)。

Mesmerは、患者に触れることにより発作を誘発することができたり、症状を改善させることができたが、それは自身の身体に流れている動物磁気が患者の身体に流入していくためであると考え

た (Thuillier, 1988, Chertok & Saussure, 1973)。したがって強い磁気を帯びた人が治療者、磁気師 (magnetizers) になれるということになる。磁気師は「分離」という手法を用いて、病気の根本にある磁気の流れを整えるのであった。

当時のフランスの王立科学アカデミーは、Mesmerとその一派の「磁気術」に危険性を感じて調査を行なった。それは磁気術を用いた治療においてしばしばセクシャルなスキャンダルが報告されていたためである。後に催眠についても知られるようになるのだが、その治療過程においては、治療者と患者との間に強い情緒的な関係がつけられる。特に磁気治療においては、治療者が自らの膝の間に、患者（多くは女性）膝を挟み込んで、目を凝視するというのが磁気を効果的に注入する方法であるとされていた (Chertok & Saussure, 1973/1987)。これが密室の中で行われた場合、情緒的なつながりが、性的な色彩を帯びることは避けがたかった。

王立科学アカデミーの調査結果は、Mesmerが引き起こした現象についての実在性は認めたものの、それが磁気によるものであるという説については否定した。磁気術は似非科学であるとして退けられたのである。

メスメリズムから催眠へ

Mesmerの死後、科学とも医術とも呪術とも似たその技法 (メスメリズム) は次第に洗練されながら引き継がれていった。

Mesmerの磁気術から「催眠」への移行の始まりは、弟子のピュイゼギュール侯爵 (Marquis de Puységur) が、この現象の中核は「分離」による意識消失ではなく、そのような状態で暗示を与えることにであると指摘したことによる。そしてその後、術式が洗練されていくなかで、催眠状態で暗示を与えると、催眠から覚めたのちにその暗示が効果を表すという「後催眠暗示」が知られるようになり、治療に用いられるようになった。リウマチの痛みや疼痛、生理痛などに効果が確認された。さまざまな麻痺症状に対して暗示を与えることによって症状をとりのぞくことに成功したのであるが、磁気師から離れると症状が復活したり、

別の症状に転移することも認められていた。

19世紀の半ばに、イギリスの外科医Braidは「催眠」は動物磁気などによって起こる現象ではなく、大脳メカニズムによる生理心理的な現象であると主張した。そして、この現象を古代ギリシャ語の「睡眠」をもとに「催眠」と名づけた。

Braidは、メスメリズムから暗示を与える技法を取り出した。1851年にBraidは、光る物体を凝視することによって変性意識状態へと移行させ、その状態で暗示を与えるという技術を確認した。これが典型的な「催眠」である。これは水晶玉を凝視させる方法や、紐で吊るした5円玉を揺らすという技法として現代でも用いられている。

ナンシー学派とサルペトリエール学派

Braidによってメスメリズムから分離されたのちも、「催眠」は科学や医学からは邪道視されていたが、徐々にある種の病気の治療には有効であることがわかってきた。なかでも際立った成果を上げたのが、1880年頃から続々と催眠についての研究成果を発表し始めたフランスのナンシー学派とサルペトリエール学派である。以下に、ふたつの学派の特徴をまとめておく。

L.Chertok & R.Saussure (1973/1987) によると、フランスの北西部の地方都市ナンシーに住む医師A.A.Liébeaultは、1860年からBraidの手法を取り入れつつ催眠による治療をおこなっていたが、1882年になって、ナンシー大学教授のH.BernheimがLiébeaultの催眠実験を目の当たりにし、自らも催眠について研究するようになった。このように生まれたのがナンシー学派である。当初、Liébeaultは催眠現象を暗示と磁気力との両方から理解していたが、Bernheimが偽の磁気水をもちいた実験によって磁気力の無効性を明らかにしたことによって、催眠の本質が暗示による心理的現象であるという見解にいたった。

一方、パリのサルペトリエール病院の院長であったJ.M.Charcotを中心とするサルペトリエール学派は、催眠とヒステリーという疾患は本質的に同じものであり。その基盤は生理学的構造にあると唱えた (Chertok & Saussure, 1973/1987, 江口, 2007)。なお、Charcotの名は精神分析の始

祖、Freudがその影響を受けていることもあって、ヒステリー患者への催眠療法を行った人物と考えられることが多いが、内科学から出発し、やがて当時の神経学の権威となった人物である。ヒステリーについての研究は晩年のもので、Charcotにとってはその経歴の一部にすぎない。

江口重幸（2007）は、Charcotは神経学的、器質的観点から客観的事実を重視していたため、無意識という不可視の領域に足を踏み入れることができなかつたのではないかと指摘している。

サルベトリエール学派も、ヒステリーと催眠の共通性は認めていた。しかし、Charcotはヒステリーが生理学的・神経学的な基盤もつ疾患であると主張していたため、ヒステリーが暗示によって生じる心理学的な疾患であるとするナンシー学派の催眠暗示説は受け入れ難いものであった。結局、両学派の論争は1889年にパリで開催された第一回国際実験的治療の催眠学会において、ナンシー学派の主張が認められるという形で決着がつくことになった。

心理分析へ

Charcotらサルベトリエール学派は、ヒステリーの治療に催眠を応用し、症状の背後にある種の観念がまわりついていることを発見した。ヒステリー症状の神経学的基盤の解明に心血を注いでいたCharcot自身は、この隠された観念と治療との関係にそれ以上踏み込まなかつたが、その強い影響を受けた心理学者P.Janetはこの観念を操作することによって症状を除去することに成功した（Ellenberger, 1970/1980）。

Janetの用いた方法は、患者が催眠状態になったところで対話をして、症状を固定している観念を明らかにするというものである。この観念は「意識下固定観念」と呼ばれ、今でも私たちが「固定観念に縛られる」などというときにはJanetの概念を用いていると言つてよいだろう。さらにJanetは患者に固定観念を修正するような暗示を与えることによって症状を消失させることに成功している。例えば、悪魔に憑かれたような状態になった男性を催眠状態にし、彼が浮気をしてしまった記憶に苛まれていることを突き止め、奥さ

んは許してくれるという暗示を与えたりしている。

Janetの用いた方法は催眠に頼つたものであったが、ヒステリー症状形成のメカニズムについては精神分析の始祖、S.Freudのそれと重なっている。もっとも、JanetもFreudも、サルベトリエール学派が蓄積してきた研究をもとにしてモデルを組み立てたのであるから必然とも言える。

無意識の探求

Ellenberger（1970/1980）によると、無意識についての探求はすでに18世紀に始まっていたが、Janetが『心理学的自動症』（Janet, 1889/2013）を刊行した1889年から1900年までの間に大きな変化が生じたという。それまで磁気師や催眠術師によって行われてきた探求は体系だつたものではなかつたが、CharcotやBernheimの登場によって実験や臨床研究によって体系的な研究が進んでいったのである。

JanetやFreudの影に隠れて、今日では忘れられているが、実験心理学の父ヴントの弟子で、ジュネーヴ大学心理学部教授のThéodore Flournoyも無意識について画期的な研究をした人物である。Flournoyは1894年に霊媒師の交霊会で、Flournoyの家族に起こつたはるか昔の事件について話され、なぜ霊媒師がそのような話を知っているのか確かめようとした。その結果、かつてFlournoyの家族と霊媒師の家族とがつながりをもつていたが、霊媒師はそのことを忘却していたことが示唆された。ここからFlournoyは無意識に特有の性質について独自の考察を深めていき、『インドから火星へ』（Flournoy, 1900/2012）という著作として発表している。

FlournoyについてEllenbergerは次のように述べている。

“彼の第一の関心事は、超心理学的過程からんでいる仮説の不要なものを避けて通ることだつた。彼はこれらの現象の多くを辿つて忘却されている無意識の記憶（それを指すために、彼は“滞り記憶”なる新語を發明した）にまで溯ることができた。”（Ellenberger, 1970/1980）

Flournoyの研究がそれまでの催眠や心霊についての研究と異なっていたのは、霊媒師の話を、霊の实在に結びつけるのではなく、それをペテンとして退けるのではなく、そこに合理的な説明を求めたことであった。ただし、Flournoyは「千里眼」や「テレパシー」も無意識の記憶の作用として理解しようとし、いわゆる「超心理学」や「心霊学」とも接点を持っていた。

無意識の4つの機能

この時期に、「意識下」(Janet)、「潜在記憶」(Flournoy)、「無意識」(Freud)などの概念が提出されたが、いずれも催眠状態やヒステリー症状などにおいて現れる特異な意識状態を意味する概念である。ここではそれらを「無意識」という呼称に統一する。

Ellenbergerは、1900年までに「無意識」の機能として、(1) 保存的機能、(2) 分離的機能、(3) 創造的機能、(4) 神話産生的機能をあげている (Ellenberger, 1970/1980)。

(1) 保存的機能

意識されなかった知覚も含む、大量の記憶を保存すること。催眠術による「記憶力の異常亢進」。夢も忘却されていた記憶。Flournoyは潜在記憶が持続的に作用し続けることを唱え、千里眼やテレパシーと考えられているものがこれによって説明できると主張した。

(2) 無意識の分離的機能

これは2つの機能からなる。ひとつは「自動化された心的現象」で、食事をするときにお箸の使い方を意識しなかったりすることである。もうひとつは「後催眠暗示」などのように、規制的存在でありながら正常生活の過程に干渉することや、「トラウマ」など心をかき乱すような心理的傾向が無意識に封じ込められながらも、それが正常生活に干渉するようなことである。

(3) 創造的機能

19世紀初期のロマン派の影響を受けたもので、理性や合理的価値観に対して、感性や自然への感受性を重視しそこに創造性の発露を見出そうとするものである。

(4) 神話産出的機能

無意識は物語や神話の創造に恒常的に関与している。夢遊病、催眠、憑依、霊媒トランス状態、常習虚言症、あるいは一部の妄想という形態で表現化される。さらに、神話産生機能は各種の器官に表現されることもあって、それがヒステリー概念の考え方の一つを提供する。

精神分析の誕生

FreudがCharcotのもとに留学したのは、ナンシー学派とサルペトリエール学派の論争の最中であった。

Freudは神経学者であり、留学前も神経細胞のメカニズムについての研究を進めていた。それがCharcotの神経学説に触れ、火曜日に行われる臨床講義に参加するようになって、多大な影響を受けた。もっともFreudがCharcotのもとで学んだのは4ヶ月にすぎないと言われているが、その臨床講義のドイツ語に翻訳する作業を行っていくなかでその思想を地肉としていったと考えられる (Ellenberger, 1970/1980)。

1882年にウィーンに戻ったFreudは、学術アカデミーでCharcotの研究を紹介し、その学説に心酔していた。しかし、ナンシー学派の催眠暗示説が力をもつようになっていくなか、Freud自身もナンシーのベルネームのもとを訪れ、その著書の翻訳も手がける。最終的にはFreudもナンシー学者の催眠暗示説に同調するようになった。

転機は先輩医師、J.Breuerとの共同研究によってもたらされた。BreuerはFreudに先立ってヒステリー患者に催眠暗示を与えて独自の治療をおこなっていた。それは同時期にJanetが試みていたことと類似した試みで、催眠状態になった患者にヒステリーの原因となった衝撃的な記憶(心的外傷)について話をさせるという試みであった。Breuerは“O. Anna”と仮名された女性の事例において、外傷的記憶を話させることで徐々に症状を回復させることに成功した。それは「カタルシス療法」などと呼ばれた。ただし、この方法はJanetがおこなっていた方法は、CharcotやJanetが試みた方法と通じるところも多く、それ自体がオリジナルといえるかどうかには議論の余地がある。

しかし、Freudによる無意識の探求は、ヒステリー患者の治療を進めていくなかで次の段階へと移っていった。「催眠」という方法を放棄して、別の方法で無意識の記憶に迫っていかうとしたのである。それが自由連想法である。この自由連想法の確立によって「精神分析」は確立された（Ellenberger, 1970/1980, Chertok & Saussure, 1973/1987）。

おわりに

「無意識」の発見は、「憑依」から「催眠」への移行から始まった。かつて憑依が信じられていた世界においては、意識の変容は外からもたらされるものであるか、あるいは魂が外に抜け出たからであると考えられていた。そこでは意識は空間の「広がり」のなかで説明されており、霊や気あるいはエーテルといった、心身の内外を循環するものが説明概念として用いられていた。この時には意識はまだ深さをもたず、層をなしてはいなかった。

近代に入ると、意識が身体の外にでていたり、別の意識が外から憑依したりするという考えは否定されるようになった。この移行において「心」が閉じた領域として意識されるようになっていったが、その心理を科学化していく上で「催眠」という現象が特別な役割を果たした。魂が抜けたように見える、「憑依」にも似たこの現象は、はじめは胡散臭い現象とみなされていたが、次第にそれを用いた治療に一定の効果が認められるようになり、学術的にも無視できない現象となっていった。ただし、ここで「催眠」が科学的研究の対象とされたと判断できるかは難しく、むしろ人間の心という神秘と科学とを結び合わせる接点のような役割を果たしたともいえるだろう。

催眠や憑依現象についての精神医学者や心理学者による探究は、特別な興味をひいた。そこで引き起こされる現象を解釈するための参照項として「無意識」やそれに類する概念成立していき、そこに独自の論理性が見出されていった。こうして、意識は空間の広がりの中に生起するものではなく、身体という閉じた空間に封じ込められたものへと変質していったのである。

文 献

- Chertok, L. & Saussure, R. de. (1973) : *Naissance du psychanalyste, de Mesmer à Freud*. Payot.
 (長井真理訳 (1987) : 精神分析学の誕生 Mesmer から Freud へ. 岩波書店.)
- 江口重幸 (2007) : シャルコー 力動精神医学と神経病学の歴史を遡る. 勉誠社.
- Ellenberger, H. (1970) : *The Discovery of the Unconscious. The History and Evolution of Dynamic Psychiatry*. Basic Books. (木村敏・中井久夫監訳 (1980) : 無意識の発見 力動的精神医学発達史 (上・下). 弘文堂.)
- Flournoy, T. (1900) : *Des Indes à la planète Mars, étude sur un cas de somnambulisme avec glossolalie*. Seuil. (小野文訳 (部分訳)
 (2012) テオドル・フルルノワ著『インドから火星へ：異言をとまなう夢遊病の一症例に関する研究』(1). 慶應義塾大学日吉紀要, 54, 73-86.)
- Janet, P. (1889) : *L'automatisme psychologique. Essai de psychologie expérimentale sur les forms inférieures de l'activité humaine*. Librairie Félix Alcan. (松本雅彦訳 (2013) : 心理学的自動症 人間行動の定次の諸形態に関する実験心理学試論. みすず書房.)
- Thuillier, J. (1988) : *F. A. Mesmer ou L'extase magnetique*, Editions Robert Laffont, S. A. (高橋純・高橋百代訳 (1992) : 眠りの魔術師メスマー. 工作舎.)